

中央アフリカ共和国の旅 (2)

～オウアム川とクランペルの宿～

小村 幸二郎

オウアム川風景

心ゆくまで眠った日の朝は 空気が甘いせいもあってか 眼ざめがさわやかである。湿度の高いバンギとは異なって バタンガフオの空はあくまでも澄み渡り 宿舎に隣接している畠では ラテライトのオレンジ色の中で 可憐な綿がそよ風になぶられて純白の身をかすかにふるわせている。地平線の果までも続くサバンナの一角に立昇る煙は 昨夜の野焼の名残りでもあろうか。

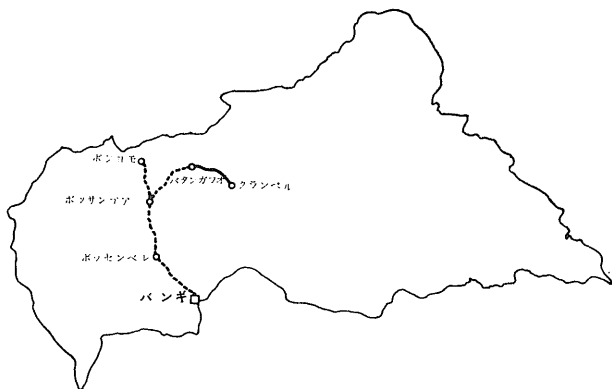
久しぶりに食べるインスタント・ラーメンの味噌の香りと味とを堪能して バタンガフオでの休日を迎えた。最近では日本の味をとくに恋しがることもなくなっているのに 味噌ラーメンを本当に美味しいと思ったのは やはり食生活にあまり潤いが無いせいだろう。同行のプロスペクターやジュル爺さんなどは 眼を輝かせてインスタント・ラーメンに舌鼓をうっていた。「スープ・ジャポネーズ」これがこれから後のインスタント・ラーメンの呼名となり 一度味を覚えた連中の垂涎の的になったのだが 残念ながら 日本を出発する前に荷物を別送するゆりのなかつた私の携行品の中には インスタント・ラーメンはわずか12個しか入っていなかった。

カメラを持って 散歩に出してみた。うっそうと茂るマンゴの並木道には こぼれ陽も少ない(第2図)。片手に持った杵を巧みに操って木臼の中のマニオクを粉にしている嫁の側に佇んでいる年老いた姑が 私を珍らしげに見やりながら「バラオ」と挨拶してくれた。「バラオ ミンギ モウ イイキ ンジョニイ ママ?」

と返事する私に 姑の顔がにっこり笑った。そして姑は「ムビ アイエケテイ マニオク ナ コビ テイ モウレンギイ テイ ワリ テイ コーノ ラ クウイ ケーケラケ (私しゃ明日の午後マニオクと河馬の雌の料理を食べたいんだよ)」という私を見て 一瞬 きょんとしていたが 腹を抱えて笑いだした。まったく見馴れない異国人が 片言とはいえサンゴ語で自分をからかうとは予想もしていなかったのだろう そこは話上手で聞上手なこの国の年寄りらしく すかさず「オッカー (O.K)」と答えた。行きずりにはじめて逢ったこの年寄は しばらくは私を忘れないだろうし また私も 当分の間この年寄を忘れないだろう。こうした何気ない会話のやりとりが はじめて訪ずれた国では 案外重要な役割を果してくれるものであり また 現地の言葉をより早く覚えるには大変有効である。

マンゴの並木道を左へ曲って オウアム川の岸へ行ってみた。 はじめて見る異国の人に興味があるのか または 写真を撮ってもらいたいのか すれ違い小供たちまでが ぞろぞろと 私の後を追ってくる。皆んなどても人なつくくて可愛いのだが くつつかれている当方は まるで 餓鬼大将そのものだ。

フェリーボートが繋いであるオウアム川の岸辺は 洗濯に精出す人や水にたわむれる人たちで 中々賑やかだ(第3 4 5図)。川の水はいささか濁ってはいるがこの水とともに生きている人たちにとっては将に命の水



第1図 調査行程図 実線は本号の行程 破線はNo.227掲載分の行程



第2図 バタンガフオのマンゴ並木 日中ほとんど陽が当たらないので 道の両側に建ち並んでいる家の人は この木蔭で涼んでいることが多い

ともいべき存在なのだろう。洗濯で汗を流してはその水で顔を洗い、喉が渴けばその水を口に含んでいる。川上から丸木舟がやってきた。妙に曲ったその舟は原木が曲っていたことを卒直に示して、なかなか愛嬌がある。舟を操っている少年はまだ10才にはなっていないのだろう。いかにも初々しいはにかみやの少年らしく、下をうつむいたまま顔を上げようとはしない。水にたわむれる裸ん坊の鋼鉄のようなたくましさと、しなやかさをもつ身体、発育のきわめてよい乙女の姿、自然のゆたかな恵を心ゆくまで受けて育つ彼等の表情は、片かけりさえも宿してはいない。

私は無心にたわむれる少年や洗濯に精を出す少女の姿を見つめながら、いつの間にか、ふだん自分のまわりでみかける子供たちが無意識の中に失なった、あるいは失なわれた何かを見出したような喜びを感じながら、一方では「文明の恩恵を受けることはよい、だがそれに毒されずに育てて欲しい」と、彼らに願っていた。

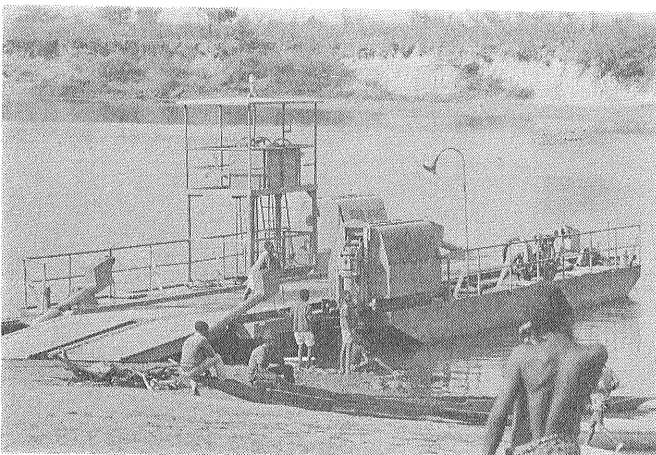
オウアム川の流れは、上流のボッサンゴア付近よりも一層ゆったりと、チャド湖を目ざしていた。ワニと河馬が棲んでいるというこの川の風景は美しく、岸の崖と木立が水面に落す影は動こうとしない(第6図)。この水の流れはやがてシャリ川に合流し、そして1,000km余も離れた北方のチャド湖に注ぐ。山もなければ、とりわけて目立つほどの丘もないチャド盆地の大平原とこれを切り割いてひそかに動くこの川の水の流れは、恐らく、遠い昔から現在まで、そして現在から未来へ、自然の意のままに少しづつその姿を変えてゆくのであろう。この大平原や水とともに生きる人も野生動物も、この自然の輪転に逆らうことなく、生活の場と態様とを変えてゆくのであろう。

目まぐるしいほどに変貌し続ける近代社会に生きる者の眼に、自然の意のままにおかれた大平原と水の流れとが、一きわ美しく映るのは、恐らく、そうした社会では既に失なわれて取戻すことがきわめて困難な人間のあるいは人間社会の原点を恋うる心のせいかもしれない。

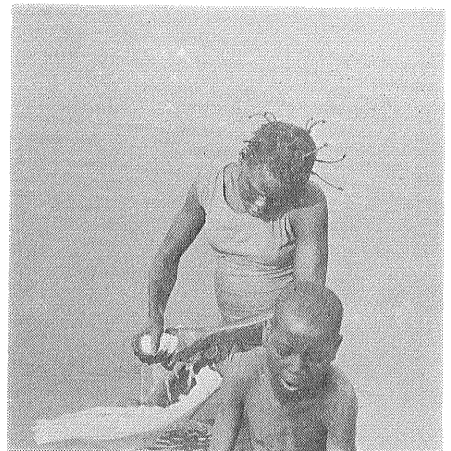
背丈ほどに伸びた葦におおわれた川沿いの小道を歩きはじめて間もなく、突然、奇妙なうなり声とも叫び声ともつかぬ音が耳に入った。ぎくりとして川岸に出てみると、3頭の河馬が、みにくい鼻面を天に突出して、深呼吸をしている。まったく、人騒がせな奴だ。日暮れになると草を求めて川岸へ上ってくるという河馬は、物凄く、獐猛だと聞いていたが、川の中央部を上流から下流へ移動しているところをみると、真屋間はやはり弱気なのだろう。もっとも、獐猛だといわれる図体の大きな河馬の最大の敵は人間らしい。

バタンガフオから2kmばかり北方の川岸に様々な形をした岩が見えると、いつの間にか、足の運びが速くなった(第7図)。この国へ来てはじめて岩の素顔を見ることができると喜び勇んで歩いてはみたものの、しかし、その岩も、やはり、新鮮ではなかった。

川岸で岩場をみるのが稀な土地だけに、この岩場の利用価値は高いらしく、洗濯にも釣にも水遊びにも絶好の場所になっている。まぶしいばかりに筋骨たくましい丸裸の男が洗濯しているすぐ近くで、中年の婦人がキビを洗っている。朽ちた丸木舟の舳先から、裸ん坊が飛び込んだ。釣糸を垂れている少年は、裸ん坊が釣糸めがけて飛び込んでも、一向に気にならないらしい。きっと、オウアム川の魚は人に対して恐怖心をもっていないのだろう。キビを洗っている婦人の傍で、10才ぐらいの女の子が、ザルで小魚をすくっている。ザルが上った。中には、ボラによく似た小魚が、6匹入っ



第3図 バタンガフオのフェリーボート
バタンガフオ(手前)と対岸とを結ぶ、オウアム川唯一の交通機関である。主要都市近くのフェリーボートは、このように動力付のものが多く、僻地では、人力で動かすフェリーボートが多い。船の多くは、船の前後にエンジンが取り付けられている。



第4図 オウアム川で洗濯する12才の少女
時折、この水で顔を洗い、また、口をゆすいでいた。木綿糸できつく巻いて伸ばした頭髪は、長い頭髪に對

ていた。やはり この川の魚は純真らしい。

2人の若者が巧みに操る丸木舟が 川下から 勢よく遡ってきた。そして 私たちの姿をみかけて 舟を近くの岩場に寄せると 小枝に通した魚を見せて 200フランといった。この若者たちは漁で生計を立てているのだろうか これだけの獲物で商売になるのだろうか 様々な形や色をしたその魚は全部で13匹 200フランといえば邦貨にして約260円である。2人で折半すれば各自の取り分はわずかに130円 これが屈強の若者が半日働いて得た収入である。

しかし 男の1日分の賃金が120フランぐらいのところもあるらしいから この収穫は あながち 少ないとはいえないかもしれない。

買ってみようかどうしようかと迷っている私たちを見ていた年頃の娘さんが その魚を買った(第8図)。彼女がその魚をどのように料理するかを深く詮策する必要はない。もっと大きな魚であれば燻製にして保存することもあるが このような小魚の料理法は 丸のまま唐揚げにするか または 煮付けるかの二通りだけだ。

11時過ぎに岩場を離れて 宿舎へ向った。河馬はもう眼の届かない遙か下流へ移動したらしく 姿も見えず 声も聞こえない。対岸の砂場で網を繕っている漁師たちのにぎやかな話し声が手にとるように聞こえてくる。これも そよ風が萱に囁き 水面をやさしくなでてゆくほかには音のない 静かさのせいだろう。

したたかに汗を流して 宿舎に着いた。既に昼食の仕度を終わっていたらしいジュル爺さんは「アターブル」といって 炊事場へ姿を消した。食わされる物は見なくても判っている。缶詰のグリーンピースと玉葱のみじん切りを混ぜ合わせて酢をかけた物が前菜で メインは やわらかいウインナーソーセージとベーコンが入った

缶詰の千切り大根だ。

毎日の缶詰料理にはいささか閉口するが とくに野菜の入手が容易ではないので止むを得ないし まして今日は休日なので 何を食わされても文句もいえない。それを百も承知しているジュル爺さんは 真白い歯をむき出しにして にやりと笑った。

田舎へ行けば行くほど野菜は豊富なだろうと想像していたが 実際は まるで逆であった。水も豊かなら土地もあり余るほどあるというのに 何故 耕地が乏しいのだろう。それは 灌漑がほとんど行われていないことや 日照と雨量に恵まれすぎているために生じたラテライトという厄介なもののせいだろうが やはり 天は二物を与えずということだろうか。しかし 水の有効利用と 土壌の改良という技術面での向上なり 外国の技術なりによって 近い将来 少なくとも十分に自給自足できる態勢を樹立することができるだろうし 是非そうなって欲しいと祈りたい。

夕暮れになった。実をたわわにつけたレモンの小枝を揺らして 娘や女房や腕白坊主が水を汲みに行く。泉は 宿舎から100mばかりしか離れていないが 一番近い民家からでも200mは離れている。

遠いということだけでも大変なのに 飲料水を汲める泉は直径わずかに40cmほどしかない(第9図)。この小さな一つの泉に多くの人が水を汲みに来るのだから 飲料水を確保するというは大変なことだが 一方話好きの人にとっては 泉が小さいということは いわゆる井戸端会議の場としてはうってつけだ。私たちもこの泉の水を飲料に用いはずが 白く濁った水をそのまま飲むことはとてもできず 沝過器を使うことを忘れなかった。しかし 沝過器に取付けてある2本の素焼



第5図 オウアム川の水にたわむれる子供たち 中央の少女の年齢は12才である。



第6図 オウアム川風景
これから1,000kmあまり流れてチャド湖に注いでいるが 水面は流れを感じさせないほど静かである。左岸の崖の下半部は 第三紀のチャド層群 上半部は砂丘堆積物。この川にはクロコダイル、河馬が棲

棒は 水に含まれている粘土質の懸濁物のために わずか1日半で用をなさなくなった。 町の人たちは この水をそのまま飲んでいるのだろうか 健康管理を考えると やはり 浄水場と水道の完備が望まれる。

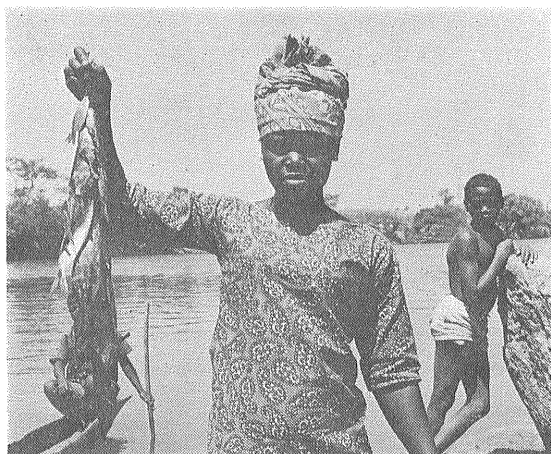
強烈な光を投げている太陽が 今は力失せて 消然と西の果に身を落してゆく。 綿島の先に続くサバンナを急速に闇が包みはじめた。 遠くに焚火が見え どこからともなくタムタムを打つ音が聞こえてくる。 私は薄暗いランプの灯を頼りに 日記を書きはじめた。 夕食前の一刻 ジュル爺さんの包丁の音も絶えたようだ。

ボオウカへの一泊旅行

弱い放射能異常を見出し得たにすぎなかったバタンガフオ地区の概査を大体終えた私たちは 中央地域の構造帯の一部を検討するために ボオウカへの一泊旅行を試みた。 必要最少限度の荷物を携行する一泊旅行ではあるが 外食するにしても食堂がないので 食糧や食器はもちろん ガスボンベから寝具まで持って行かなければならないので 身軽な旅ともいえない。

ジャン・クロードとパスカルを留守番に残して 2月9日午前8時40分 私たちはバタンガフオの宿舎を出発した。 宿舎の前から町の中心へ続くマンゴ並木の隙間からは 強烈ではあるが実にさわやかな 朝の光がこぼれている。 顔見知りの姑が今朝もにこやかに手を振ってくれた。 バタンガフオからボオウカまで97 kmの一級国道4号線は 目的とする構造帯の主部をなす花崗岩類と変成岩類を横断し ゆるやかにうねりながら サバンナとジャングルをぬって南下する。 しかし 厚いラテライトにおおわれているこの道中では やはり 岩石の新鮮な露出はみられなかった。

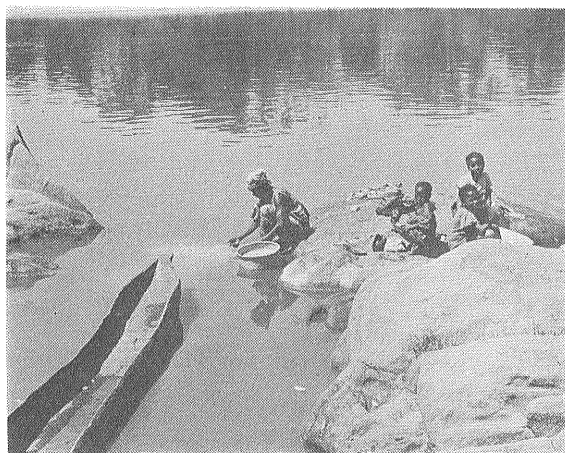
午前11時にボオウカに着き 早速 小高い丘の上に建



第8図 オウアム川で釣った魚を漁師(舟に乗っている男)から買った娘さん。 この娘さんの服装は この国の婦人の一つの典型的なものである。

つ郡役所を訪ずれて挨拶をすませた後 ここからおおよそ18 km 南方のパンボロロへ車を走らせた。 町の中を流れる コミ川の岸辺では 数人の女性が洗濯に余念がなく 水にたわむれる子供たちは実に元気だ。 道路の東側に沿って延々と続くバナナ畑がサバンナに変わったとたんに 家並は絶えた。 パンボロロの部落はひっそりとして 人影もあまりない。 部落の南端部で車から降りたとたんに マニオク特有の異様な匂が鼻をついた。 この部落を訪ずれた目的は50万分の1 地質図幅に示されているペグマタイトを見ることだったが 現地は既に一面の綿島と化しており その露頭を見ることはできなかった。 しかし 付近一帯が微弱異常を示すところをみると ペグマタイトはやはり存在するのだろう。

午後1時に ボオウカの宿舎に帰った(第10図)。 ジュル爺さんは 昼食の仕度を既に終わっているらしく 軒先の陽蔭で のんびりと煙草をふかしている。 白地に



第7図 オウアム川の岸に露出する絹雲母石英片岩とキビを洗う婦人。 パンギ出発以来はじめて見た露出だが 新鮮な試料を採取することはできなかった。



第9図 バタンガフオの宿舎の近くにあった飲料水の泉。 ラテライトを直経40 cm ぐらいに掘って造った人工の泉で 粘土質の懸濁物を含んでいるので 白っぽくにごっている。 女性が立っているところは 洗濯場になっているので あまり上等の飲料水とは云えない。

真紅の太い横縞が入っているシャツと半ズボンを着ている2人の囚人が水を汲んできた。多分 ジュル爺さんにいつけられたのだろう。ジュル爺さんは 彼らにとっては 一っぱしのボスらしい。

乾燥煉瓦を積重ねて造った壁と萱葺きの屋根からなるこの宿舎は この国ではふつうにみられる家とまったく同じ造りである。壁の上限は煉瓦を積重ねたままなので屋根との間に隙間があり 太い材木に竹を渡しこれに萱をかぶせて蔓で縛って造ってある屋根は 高く そして適当に隙間があるので 換気と通風が大変役立っている(第11 12図)。壁材も屋根材も多分無料で手に入るだろうし こうした家の建築費は 恐らく 職人の手間賃ぐらいのものだろう。だが こうした造りの家を見ていると 壁の煉瓦が波うっているのが珍しくないから 案外 自分の家を自分で造ることが多いのかもしれない。



第10図 ポオウカの宿舎。乾燥煉瓦を積重ねて白ペンキを塗った壁の上に萱葺きの尾根を載せたもので 内部は涼しい。内部は居間と三つの寝室 水浴び場に分かれており 炊事は裏の軒下でするようになっている。

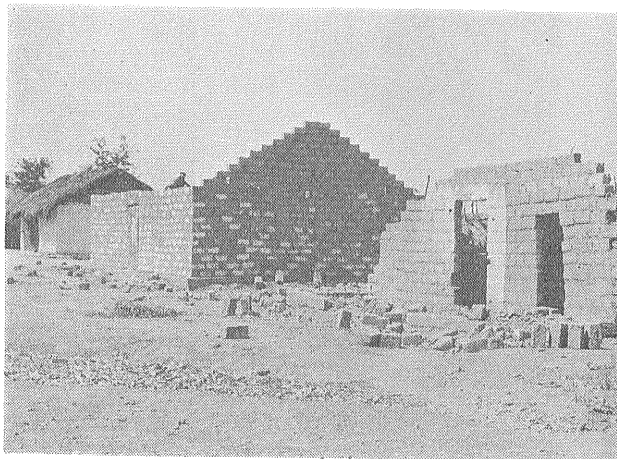
緑に包まれた広い土地に自分の手で造った家に住めるとは まったく羨やましい限りだ。

水を浴び 昼食を終えて一休した後 近くの市場へ行ってみた。動物や魚の燻製 野菜 果実 下着類など品物はかなり豊富だ。私は 椰子の葉で編んだアンペラの上にほんの少しばかりのドンゴ(唐ガラシ)と岩塩を並べて商っている老婆に妙に魅かれて 足を止め 一片の岩塩を手にとってみた。

不規則で薄っぺらな形をしたその岩塩は 結晶質の純度の高いものではなく 砂漠地帯でしばしばみられるものとそっくりだ。しげしげと岩塩を見ている私の眼の前に その老婆が ふしくれだった手で 大きな岩塩の塊をつき出した。言葉が通じないので 多分 それを買ってくれというのだろうと思って ポケットから100フラン硬貨を出したら どうしても受取ろうとしない。

そして その岩塩が老婆から私へのプレゼントであることが 老婆の巧みなゼスチュアで 判るまでにはほとんど時間はかからなかった。私には その老婆の優しさが嬉しかった。そして 老婆へのお礼の意味をこめて 100フラン分のドンゴを買った。もう30年余りも老母と離れて暮している私は こうした年寄の親切には滅法弱い。日暮れとともに 町は静寂に包まれ 宿舎にもランプが灯った。ポッサンゴアやバタンガフオよりもはるかに南なのに いつも気になっていた蚊はまったく見当らず 結構涼しい。だが 屋根裏にはこれまで見なかった蝙蝠が無数に巢食っていてチチツチツと鳴き 部屋の中では大きな蜂がわがもの顔に飛び廻っている。

しかし 不思議に そうしたものが一向に気にならない。機械化された社会に日頃住んでいて自然のありのままの姿に飢えているせいかどうかは分からないが 私は



第11図 建築中の家。乾燥煉瓦を重ねて屋根を載せると左端に見えるような家が出来上がる。壁の上端部はこのままで 屋根との間に出来る三角形の隙間は 通風孔の役目をする。



第12図 家の内側からみた屋根。太い材木(この写真のように角材を使っていることは少ない)に丸太を載せ その上に竹を載せて萱で葺いてある。釘は使われず 丸太や竹はすべて蔓でしばってある。

蝙蝠の鳴声や顔すれすれに飛び廻る蜂の羽音に 今は遠い少年時代の思い出に耽りながら それを避けようとはしなかった。

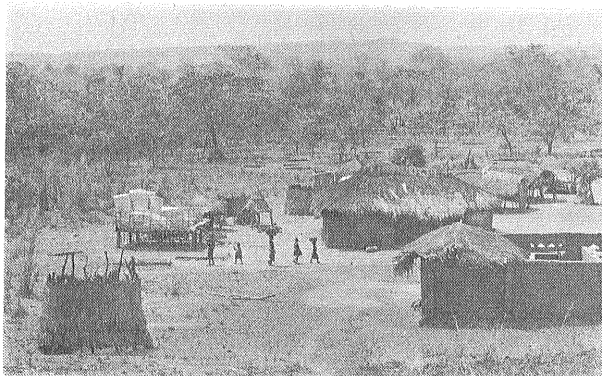
夜もすっかり更けて皆はとっくに眠っているというのに 妙に眼がさえて寝つけない。午前1時20分 ポケットライトで足元を照らしながら そーっと表へ出てみた。今にも落ちてきそうな大粒の無数の星 風はなく 闇に浮ぶ灯もない。恐ろしいほど静かな そして 平和に満ちあふれた夜である。

睡眠不足で重い頭をかかえて 5時30分にベッドを離れた。ココア1杯とパン2片の朝食を終えて 6時50分にボンゴヨへ向った。道路は狭いが大きく破損した部分はよく修復されている。この奥には大きな村もないし また 国道でもないこの道路の手入れがよいのに 少々疑問を抱きはしたが この疑問もすぐにはれた。それは この道路の終点に当るボンゴヨまでの間には綿島が点在しており この道路が綿花を集荷する大型トラックの通路となっているためだ。

11時 目的のボンゴヨに到着した。台地の東端部に位置するこの部落は戸数40ぐららしい。雄大なサバナを控えたこの部落からの眺望は雄大である(第13図)。持参した軽食をとって 目的のデイ川へ向うことにした。先程から珍らしげに私たちを見ていた少年が案内役をかってくれた。半袖シャツに半ズボンを身に着けたピエール少年のすらりとのびた足は 鋼鉄のような強靱さと 羚羊のようなしなやかさを兼ね備えているらしく リズミカルに歩くこの少年は実に健脚である。収穫を終ったばかりで集荷のトラックを待っているらしい広々とした綿島の所々に 小山のように積み上げられた真白の綿が見える。行けども行けども尽き果そうにない綿島を横切ってようやくデイ川の岸に着いた。川幅は5mばかりで水量も多くはないが 例に洩れず この川もうっそうと茂る巨木に抱かれて 音もなく流れていた。川底に溜っている礫の9割ぐらいは絹雲母片麻岩と絹雲母石英片岩の礫らしい。丸木橋を渡った所にラテライト化した珪岩が高さ約1m 長さ5mばかり露出していたが もちろん 測定器の指針は動いてくれなかった。

川に沿って 下流へ歩きはじめて間もなく 灌木の林をくぐり抜けると 突然 視界がひらけた。野焼の跡だ。野焼をしてまだ間もないらしく そこには蟻塚も草の新芽も見当らない。野焼の火の勢は恐ろしいほどにすさまじい。それなのに 所々に草が焼け残っているのはどうしてだろう。

デイ川の大きな蛇行部の川底に 岩盤が露出している。



第13図 広大なサバナを背後にしたボンゴヨの部落。中央やや左の白いものは 集荷を待つ竹カゴに入った綿花。

一見新鮮そうなこの岩盤は片麻岩であったが ラテライト化こそしていないものの 構成物質の大部分がすっかり変質していた。研究試料としてはあまり役に立ちそうにない岩石ではあるが パンギを出発して以来調査地域内ではじめて見たこの岩石の1片を 72021001と記したポリエチレン製の袋に入れた。1972年2月10日に採取した最初の試料であるこの岩片は ここからボオウカへ帰る途中で細かく砕けるには違いないが 私にとっては 中央アフリカ共和国における数々の思い出につながる貴重な宝の一つである。デイ川の水で汗を流して 私たちはボンゴヨへの別の道を辿った。異常なまでにむし暑いせいか または はじめて岩盤を見た喜びとそれがすでに朽ち果ててそして期待した放射能異常を発見できなかった落胆との相交又する心の乱れのせいか ふだんよりは疲れがひどく 加えて 頭痛が激しくなってきた。

足を運ぶ度に 頭の芯を錐で刺されるようだ。足よりも軽やかに無表情で歩くピエール少年との間隔が 次第に遠くなってきた。だが 気が焦る割には足は進んではくれない。綿島が 今朝通ったときよりも 2倍も3倍も広がったような感じだ。

ボンゴヨの部落で小休止して ボオウカへ向った。身体はだるく 車が揺れる度に頭が痛む。結晶片岩らしい岩塊が道路からほど近い所に転がっているが 今はそれを叩く気にもなれない。2時間あまりかかって ボオウカの宿舎に帰り着いた。そして私は アノラックを着こんだまま 木製のベッドに身を横たえ 間もなく 深い眠りに落ちていった。

5時40分 短い時間ではあったがぐっすり眠ったせいか 目をさました時には 頭痛もかなりうすらいでいた。バタンガフオへの出発準備を手早く終えて 郡長宅へ挨拶に伺った。小高い丘の上に建っている郡長宅

の広い庭には マンゴの巨木が茂り オレンジの木は枝も折れんばかりに たわわに実をつけている。深い緑に包まれた白亜の家の美しいたたずまい ベランダでくつろぐ私たちを慰めるように 涼風が吹き抜けてゆく。

魅力ある中年紳士とは ダモイシュ・アンドレ郡長のような人のことをいうのだろう 立派な体格に深い智性と教養を秘めた静かな物腰と目つき そして同夫人はきわめてさっぱりして快活な方である。聞けば ボッサンゴアから昨夜遅く帰ってこられた郡長は 今日私たちが昼食を共にするつもりで 私たちが調査から帰ってくるのを待っていて下さったとのことだ。しかし 私たちが宿舎に到着したのは3時40分 昼食にはあまりにも遅すぎた。

ビールを御馳走になり 親しく話しているうちに闇が迫ってきた。お二人にお礼を述べ 別れを告げる私たちに 令夫人は 私たちのために切角作って下さった昼食の料理と持ちきれないほどのオレンジを下さった。これからバタンガフオへ帰ってから夕食をとる私たちへの優しい心づかいであろう。

6時30分 ボオウカに別れを告げる時がきた。遠くからそこはかたなく聞えてくるタムタムの音色が一入わびしさをかきたてる出立の夜の道は 家のありかをわずかに示す灯が絶え バンパニの村の野焼の火を最後に深い闇に閉ざされた。

心地よいエンジンの響と冷んやりとした夜風になぶられていたうちに頭痛を忘れ 8時15分 ジャン・クロードとパスカルが待つバタンガフオの宿舎に着いた。

いつもは炊事に精を出すジュール爺さんも 今夜は インスタント・スープとお茶を準備するだけだから ふだんよりは楽なものだ。郡長夫人の心づくしの鶏の丸焼

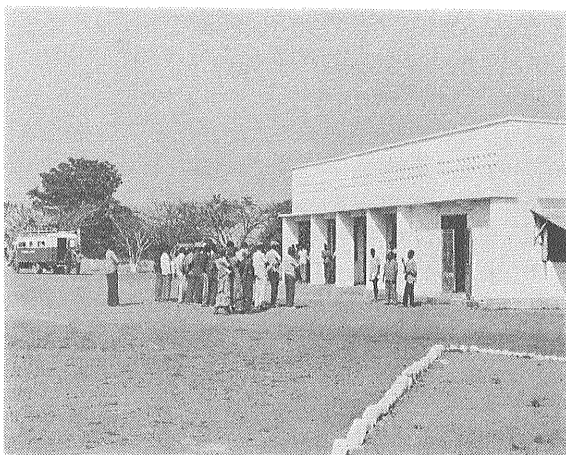
はニンニク醤油で味付けしたような抜群の美味さで 将に 日本の味 そして 山芋とそっくりの味と菌ざわりのグイの煮付と米飯も大いに食欲をそそった。食事を始めて間もなく 数々の料理は 鶏の太い骨だけを残して きれいに胃袋に納まってしまった。その最大の理由が 郡長夫人の卓抜した料理の腕と乏しい食生活を送っている私たちに対する深い愛情であったことはいまでもない。

タムタムのリズムがいよいよ激しく そして 早くなってきた。ベランダに通ずるドアには幾つかの隙間があるが 今夜も その隙間からしのびこんでくる光はない。真暗な部屋の片隅に置かれた携帯ベッドに腰をおろして 私は ペンライトの弱々しい光を頼りに さわやかな気持で日記をつけはじめた。

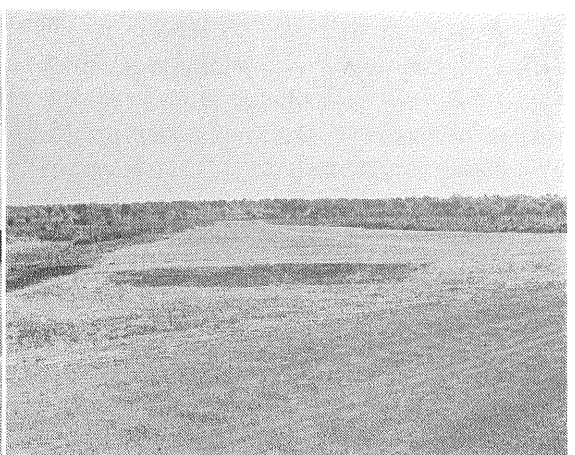
ク ラ ン ペ ル ヘ

さわやかに目ざめたクランペルへの移動の朝 空の青さと深い緑の中にくっきりと浮んだ真紅の花は 微動だにしない。朝食を終え 出発準備をして これまで世話になった泉へ行ってみた。泉の水は 昨夜から人手に触れられていないせいだろう 日中は白く濁っているのに きれいに澄んでいた。人影はなく 泉に近い洗濯場や子供たちの遊び場になっている池の水面も 静まりかえっている。この泉ともオウアム川の流れともいよいよお別れだ。今日を最後に、もう再びこの土地を訪れることもなからう。泉に立って雄大なサバンナを見つめているうちに 淋しさとうつろさのようなものを感じて 切なくなってきた。

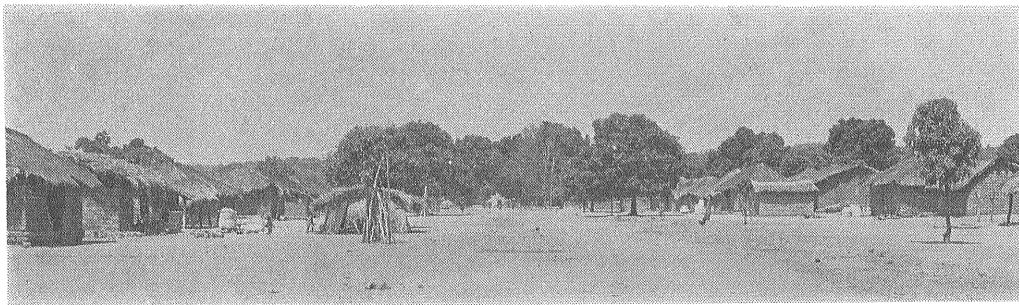
8時30分 宿舎を後にして郡役場へ向う。役場の広場では 職員に対する郡長の訓辞が行なわれていた(第14図)。私には 郡長の訓辞の内容はまったく判らない



第14図 バタンガフオの郡役場と職員に訓示する郡長(右から2人目) 右下の白ペンキを塗った石に囲まれた所に 国旗塔がある



第15図 バタンガフオの滑走路。サバンナを伐採して造ってあり 路面は芝生におおわれている。不定期に離着陸する小型飛行機用の滑走路なので とくに建物はない。場所はバタンガフオの中心を歩いて5分ほどの場所である



第16図
オウアンダゴ
の村
ケモグリピン
ギ県とオウア
ム県との県境
にあり 村と
しては大きい
方である。
この程度の村
にはキリスト
教会があり
主としてフラ
ンス人または
アメリカ人の
宣教師が 布
教と一般教育
などに活躍し
ている。

が 微動もせずとその訓辞に耳を傾けている職員たちの真剣な目ざしに 国造りに励む人々の規律正しい振舞いと意気込みとが感じられた。とかく忘れられがちな規律と国造りに励む心とは その国がそしてその国民がより美しく よりたくましく成長するための絶対条件の一つに違いないはずだが 果して 真の独立国と自他ともにゆるす国で 自分で定めた規律がどれほど守られそして 民の一人一人がどれほど自覚し かつ 努力しているだろうか。

フランス領赤道アフリカ連邦に属していた 4国とフランスを象徴する青・白・緑・黄の4条の横帯の中央を縦断する真紅の帯がこれらすべてに共通の血の色を表わし 上端部に輝やく金色の星が人間の豊かな生活の基調となる衣・食・住・教育・福祉と人間性の完全な開花を象徴しているというこの国の国旗は La Renaissance (再生 復興時代)と名付けられた国歌とともに 過去の歴史と生きる道とを卒直に示している 美しい国旗である。そして 晴れ渡った天空に満ち溢る光を受けてひるがえる国旗と その国旗の下に結集する若人の目ざしは この国の将来の栄光と無限の可能性を力強く物語っているようだ。

郡長宅でコーヒーをご馳走になった後 ようやくなじんだバタンガフオを後にした。道路際の市場は相変わらず賑わってはいるが 市場の人々や道行く人が手を振って別れを惜しんでくれる姿を見ると やはり 心は残る町の北端部にある芝生を敷きつめたような滑走路を過ぎたとたん 家並は絶えた(第15図)。ここから克蘭ペルまで114kmの道は 二級国道10号線だが 大部分が一級国道のみである。

チャド盆地の南縁部に当るこの付近はサバンナにおおわれた大平原のはずだが 地形が平坦なことと視界が灌木に遮ぎられるために そのたたくまを望むことはできない。車の揺れも少なく 風景を楽しむこともでき

ないとあって シンチレーションカウンターにスイッチを入れ チャド層群の分布区域を離れるまで 指針の動きをみることにした。バタンガフオの東方5kmの地点で道路は分岐する。北方へ向う国道4号線は122kmでチャド共和国との国境に達し さらに チャド共和国の主要道路と連絡して首都のフォール・ラミイに通じている。乾期中で水の流れが豊かでなくなっているパアフィオ川を渡っておよそ13kmの地点で 自然強度の4倍程度の微弱異常をとらえた。この位置は バタンガフオの南東方14km付近でチャド層群におおわれてこれより北東方への露出を断たれている 中央構造帯の主要構成員の一つである花崗岩体の北東方に当るので この程度の微弱異常といえども注意をひくが 今は その原因を探索する時間的ゆとりもなく 一路克蘭ペルを目ざして その場を走り去った。

11時丁度 オウアンダゴの部落に着いた(第16図)。

道の両側に建ち並ぶ家の造りはこれまでに見たものとまったく同じだが 戸数はかなり多い。総体的に気候が高湿多湿型である上に 野生動物が往行するという土地柄にしては 高床式の家が見当らないのは何故だろう。その理由はよく分らないが 南部の密林地帯を除いてはそうした構造の建築物を造るために必要な木材を入手することが困難なことも 理由の一つになっているように思われる。

マンゴの木蔭に車を停めて小休止することにした。道路傍でロボトやビリビリ(どちらもドブコク風の地酒)を商う女は急に忙がしくなり 木蔭で世間話に興じていた村人はぞろぞろと集って来た(第17図)。手を差しのべて気軽に挨拶を交して迎えてくれる村人たち この国ではどこへ行っても また どんな部族の人も 皆んなが人なつこくて真に好感がもてる。マニオクを原料とするロボトは透明で焼酎とそっくりの味 キビを原料にしたビリビリは 淡い褐色で 幾分酸味のあるドブコクそのものだ。同行の連中は美味そうに飲んでいるが

アルコールに弱い私は ビリビりを一口飲んだだけで顔が真赤になった。

オウアンダゴの村は 東のケモグリビング県と西のオウアム県との県境で しかも バタンガフオとクランペルとのほぼ中間地点に位置しており また ここからはチャド共和国へ通じる国道4号線に面するカガまで三級国道が通じている。この村が意外に大きいのは 多分このような地理的条件のせいだろう。

同行の連中はロボトやビリビりで喉をうるほし 私はパンプリモス(グレープフルーツ)で喉をうるほしてオウアンダゴを出発した。小さな教会の前を通り ゆるやかな坂を下りきった所で道路と直交するバッサ川に架かる橋を渡って間もなく 路面が悪くなった。これまでうら続いていたチャド盆地の平原をつくっていたチャド層群の分布区域から先カンブリア期の結晶片岩類の分布区域にさしかかったせいで。このような悪路は岩石の露出がよいだけに地質家には有難がられてよいはずだが 先を急ぐこの時点では やはり 嫌らしい存在でしかない。しかし この悪路は長くは続かなかった。マンゴの並木と家並の中で 道路は元の落ち着きを取戻した。人々の陽気な声 日傘をさしてハイヒールで歩く民族衣裳の女性の美しい姿が目につく。そして私たちは いつの間にか 目的のクランペルに入っていた。

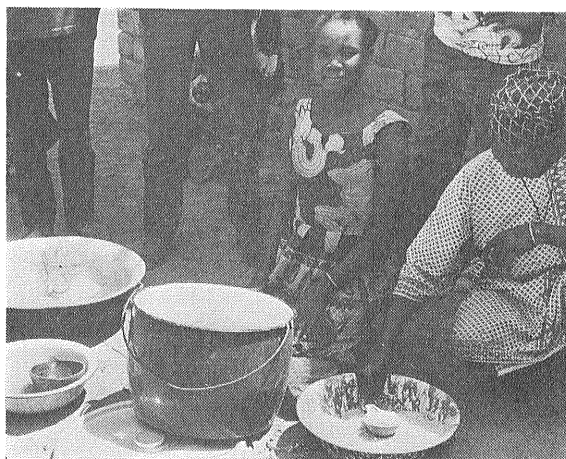
ク ラ ン ペ ル の 宿

白と赤とに色どられたクランペルの宿は 高く茂るマンゴの深い緑の中に ひっそりと建っていた(第18図)。市場や商店街からかなり離れているので買物には若干不便だが この宿舎付近がこの町のほぼ中心地なのだろう 郡役所や病院や学校などが宿舎の近くに建っている。玄関の階段を上り 広々とした居間を通過して 東側に設

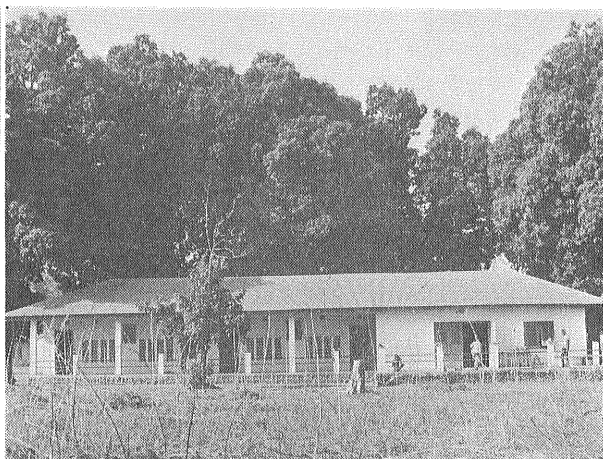
けられたベランダへ出てみると 既に収穫を終った広大な綿畠とグリビング川に沿って回廊状に茂る巨木の林の彼方に 比高100mばかりのチャーノッカイトの丘が見えた。この宿舎には かつては異国の人が住んでいたであろう 電燈線や給水パイプが各部屋にあるにはあるが それらのすべてが 今は 無用の長物と化している。この家の主が居なくなってから既に久しいと思われるこの家の内部の変わり果てた様子は 一体 何を物語っているのだろうか。朽ち果てて見る影もない給水設備や電燈線 廊下やベランダの頑丈な鉄の手摺 そして無数の蝙蝠の棲家となっている屋根裏や軒先 私には この国がたどってきた過去の姿と将来像とが この家にも秘められているように思えた。

この宿舎で1週間の滞在を予定しているとはいっても概査予定範囲が広いので 連日の調査はかなりの強行軍になりそうだ。宿舎に到着して早々に 荷物の整理をして一応落ち着いた後 コーヒー・パン・缶詰のささやかな昼食を終えた。この食事で最高のご馳走といえば プロスペクターのバトーカーがどこからか仕入れてきた氷であった。冷たい飲物にはもちろん 清浄な飲料水にさえことかいていた私たちにとっては この氷ほど私たちを元気づけてくれたものはなかった。これも バトーカーの心づかいと 心よく氷を分けて下さった郡長のおかげだ。

日没近く チャーノッカイトの丘の頂がオレンジ色から淡紫色に変わり どこからともなく飛んできて宿舎のベランダ近くの灌木に羽を休めた大きなミミズクは 闇の訪ずれを待っているのか 動こうとはしない。だがそれを見つけたパスカルが「悪魔 悪魔」と叫びながら投げつける石に追われて まだ十分に眼の見えないこの鳥はその木蔭から飛び去って行った。パスカルの話で



第17図 地酒を売る女。オウアンダゴの道路傍でマニオクを原料にしたロボトとキビを原料にしたビリビりを売っている。ロボトは香りも色も味も日本の芋焼酎とそっくりで ビール瓶1本分で大体130円ぐらいである。



第18図 クランペルの国営宿舎。後方のマンゴの巨木と手前の綿畠との間にひっそりと建っている。珍らしく屋根はトタン葺であり 外観は立派だが 屋根裏には無数の蝙蝠が巢食っていた。右端の大きなドアのある部分が居間とベランダ。左側に寝室が

は ミミズクは 悪魔の使いとして嫌われているという
ことだ。

ミミズクは 確かに 猛禽類に属し 肉食をするが
人間に危害を加えることもないのだから 何故こうも
嫌われるのだろう。 まん丸い目が光の中では役にた
たないというこの鳥のいささかおどけたような顔を思うと
悪魔と呼ばれるにはいささか気の毒な気もする。

広い綿島の上空で舞っていた20羽ばかりの鳶が 急に
2つの群に分かれ その1群が宿舍のすぐ近くを低く廻
りはじめた。 ぼんやりと夕暮を見ていた私は この鳶
の奇妙な動きに 興味を抱きはじめた。 突然 宿舍の
軒先とマンゴの木蔭にたむろしていた蝙蝠が数10羽 疾
風のように 飛び立ち 近くで旋回していた鳶の1群が
別の1群が待ち受けている方へ その蝙蝠を追った。
その隙に 今度は数100羽の蝙蝠が 鳶の群とはまったく
逆の方角へ 一勢に飛び去った。 それに気づいた鳶
はこの蝙蝠の大群を追いはしたが 時既に遅かった。
鳶と蝙蝠とのこの駆逐は幾度となく繰返されはしたが
闇が訪ずれるまでに鳶の餌食になった蝙蝠は1羽もい
なかった。 弱肉強食のならいは 野生の世界でも栄華の
都にあっても 避けようとして容易に避けることのでき
ない生あるものに与えられた宿命の一つである。

この宿命は 精神的にも肉体的にも 拒絶と抵抗を打
破って弱者にのしかかってくる。 しかし 強者が弱者
に常に勝るとはかぎらない。 それがわれわれの世界の
ならわしである。 幸か不幸か 鳶の餌食となる蝙蝠の
悲しい姿を見ずに夜を迎えることができた。 快晴の空
に散りばめられた無数の星の恐ろしいばかりの輝の下で
夕食は ベランダではじまった。 モカフと赤ブドー酒

ではじまった今夜の食事は ジュル爺さんが焼いたパン
(第19 20図) とポタージュ・スープ サラダ それに
克蘭ベルから50 km ばかり東方のサバナ地帯で 今日
獵師が仕止めてきた鹿のステーキである。

遠く近くから聞こえてくるタムタムの音に呼応するよ
うに 軽快なジャズのリズムがかすかに伝わってくる。
夕食を早々とすませた若者がビストロに集まりはじめた
のであろう。 暗闇の中に点々と灯る焚火は 決して大
きくはないが 一日を無事に終えようとしている人々の
相寄る心の和む場であることを美しく示して さわやか
な光を投げている。

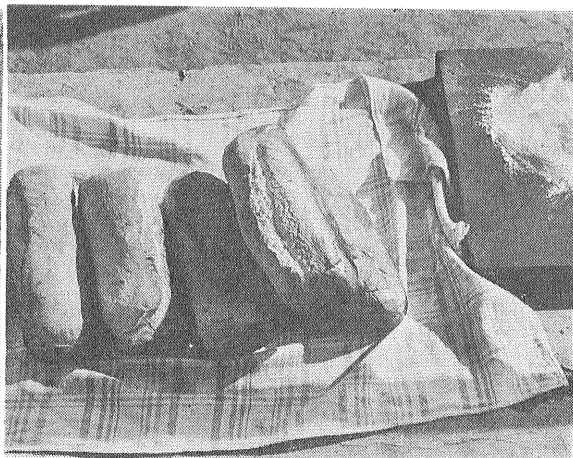
ベランダの片隅に灯るランプの光を求めて無数の蛾が
乱舞し 屋間はまったく見かけなかった蚊が いつの間
にか 血を求めてしのび寄ってきた。 そよ風の涼しい
ベランダでの食後の語らいを終えて 部屋に戻った。
屋根裏をめぐらしている蝙蝠は 人の気配に驚いたの
か チッチチッと鳴きはじめた。 燈油ランプのほの
暗い灯を頼りに 今日一日のメモを書き終えて 中央構
造帯とンデレ付近から南西方へかけて広大な地域を占め
る 変動時花崗岩体の南端部に挑む唯一度の機会である
明日から1週間の行動に思いを廻らせて 時のたつのを
忘れた。 50万分の1地質図幅を唯一の頼りとする1週
間の行動は 地質家としての自分の能力というよりはむ
しろ 今回の調査行の成否 さらには 日本とこの国との
今後の友好関係にも影響する一つの鍵となるといって
も決して過言ではない。

同行の連中は町へ出かけたのであろう 広い宿舍は
一つのか細い灯を残して 深い闇の中にある。 行き交
う自動車の音も絶えた。 静かな情緒あふるる夜 そし
て 心を砕く夜ではある。

(筆者は鉱床部)



第16図 パン製造。 まずオキを作る。 次に高さ20 cm ぐらいの石を
三方において その上にドラム缶のフタを載せ 地面とこのフ
タの上にオキを載せる。 鉄製の器にサラダ油を塗り イース
ト菌を入れてよく練ったメリケン粉を直径5 cm 長さ15 cm
ぐらいに成型してこの器に入れ 図のようにおいて5分間ぐら
いたつと 食パンが出来上がる。 植生の乏しい中東の砂漠地帯
では 煎餅のように薄いパンを作るが このパンと図のパンと
の違いは薪を入手しやすいかしくいかにということに関係があ



第20図 出来上がった食パンと成形用の台(右側)。 味は市販のものと同
じで 乏しい食生活がこのパンのおかげでどれだけ救
われたか測り知れない。